

新進芸術家海外研修制度 研修結果報告書

研修開始年度 | 令和 4 (2022) 年度

分 野 | 美術 (アートマネジメント)

研 修 先 | アメリカ (バークレー)

研 修 期 間 | 1 年

氏 名 | 五十嵐 純

1. 研修目的（課題）

受け入れ施設での滞在制作や教育普及事業を関連づけた事業効果や評価方法を調査し、また様々な国籍と人種が暮らす周辺地域において、参加や対話を通じたアートプロジェクトの実践や障害者を対象とした芸術施設での取り組みを調査すること。

2. 研修日程

研修先 : カラ・アート・インスティテュート (Kala Art Institute)

所在地 : アメリカ (バークレー)

指導者 : 濱中 麻由美 (Mayumi Hamanaka)

研修期間 : 令和4(2022)年12月8日～令和5(2023)年11月21日

3. 研修内容、成果

A) 研修課題の題目

【課題①】 受け入れ施設における、年間運営状況や施設、プログラムについて等の調査

【研修内容・方法①】

指導者である Mayumi Hamanaka 氏や他のスタッフ、研修施設である [Kala Art Institute](#)（以下、Kala と表記）を設立した Yuzo Nakano 氏、Archana Horsting 氏などへのヒアリング、実際のプログラムへの参加、資料調査等を行った。

【課題②】 アーティスト・イン・レジデンスプログラム、プリントスタジオの運営、ギャラリーでの展覧会事業、教育プログラムなどの事業開始の経緯、運用における課題、成果、外部評価など

【研修内容・方法②】

課題①と同様に、指導者である Hamanaka 氏や他のスタッフらへのヒアリングおよび、資料調査等を行った。

【課題③】 受け入れ施設における過去に行われた事業の調査、事業変遷経緯調査

【研修内容・方法③】

課題①と同様に、指導者である Hamanaka 氏や他のスタッフらへのヒアリングおよび、資料調査等を行った。また、事業変遷経緯調査と合わせて、過去滞在制作を行ったアーティストらが寄贈を行った作品の実見調査なども行った。

【課題④】 Parents Residency Program の調査

【研修内容・方法④】

過去参加したアーティストへのヒアリング、Kalaの[Parents Residency Program](#)への助成を行なっている[Sustainable Arts Foundation](#)へヒアリング、及び過去資料の調査や類似プログラムを行なっている団体等の調査を行った。

【課題⑤】過去のコミュニティープロジェクトの調査

【研修内容・方法⑤】

前年度まで研修施設と共同で行われていた〈[COMMONS ARCHIVE](#)〉プロジェクトについて、同プロジェクトのアーティストである Sue Mark 氏のスタジオを訪問し、プログラムの経緯や今後の展開についてのヒアリングを行った。研修期間中は、研修施設と共同しての活動は終了していたが、活動自体は継続されていたため、実際にプログラムが行われた際には、現地訪問を行い、見学した。

【課題⑥】現在行われているコミュニティープロジェクトの調査

【研修内容・方法⑥】

元受刑者や地域のコミュニティーの若者らが農業訓練も兼ねて、従事する植物の苗などを生産する農業施設の[Planting Justice](#)と共同で行っているコミュニティープロジェクト[REENTRY THROUGH THE ARTS](#)の調査を行った。実際に隣接市であるオークランドの Planting Justice で行われたワークショップを複数回視察した。

【課題⑦】受け入れ施設におけるエデュケーション・プログラム（[Camp Kala](#)/サマープログラム）調査

【研修内容・方法⑦】

想定をしていた運営自体への参加は、プログラムの性質（不特定多数の児童が参加することや講師と生徒の信頼関係、スタッフの状況など）や同時期に実施した事業調査により実施できなかったが、内容や講師などを含めたプログラム編成等について調査し、また実際の Camp Kala 実施期間中は、見学等を行った。

【課題⑧】その他、展覧会企画等補助

【研修内容・方法⑧】

実際に Kala で行われている展覧会事業を中心に年間を通して事業に参加した。主には指導者の Hamanaka 氏の担当する業務の補助等を行わせていただき、リサーチや資料作成補助、設営時におけるアーティスト補助などを行った。

【課題⑨】西海岸地域における SEA 事例の調査

【研修内容・方法⑨】

展覧会の視察や、書籍やウェブサイト等を中心に滞在地域において過去行われた SEA を調査し、滞在中知り合った現地のアーティストらから特徴的な事例を教えてもらうなど、情報収集を行った。

【課題⑩】周辺芸術文化施設（レジデンス施設、アートセンター）のリサーチ

【研修内容・方法⑩】

障害を持つアーティストの支援を行う [Creative Growth](#) や、レジデンスプログラムを長年行っている [Headland Center for the arts](#) やゴミ処理施設が運営する [Recology Art Center](#) などを訪問し、実施されているプログラムなどを見学した。

B) 研修の成果

【課題①】受け入れ施設における、年間運営状況や施設、プログラムについて等の調査

大幅に達成できた

指導者である Hamanaka 氏をはじめとした Kala の職員から年間を通して話を聞き、実際のプログラムの見学や参加したことで、ヒアリングのみでは得られない情報を得ることができ、理解を深めることができたと考える。

Kala は、日本国内の施設と比較すると展示空間を除外したプログラムの多様さ・業務量からは、中型美術館程度の施設同等であると思う。当然、公立施設ではないが故であるが、変化する環境に合わせる意思決定やスタッフの行動の柔軟性は、公立館での経験が主であった私にとっては大きな学びとなった。

・研修施設となった Kala は、1974 年に Yuzo Nakano 氏と Archana Horsting 氏によりサンフランシスコにて設立され、半年後にパークレーに移転。1979 年に現在の場所（ハインツケチャップの元工場跡地）に移転し、2009 年に大幅に施設やプログラムを拡大している。また、2023 年 12 月からはスペースの拡大が行われる。施設のミッションは、「アーティストインレジデンスとフェローシップを通じて長期的な作家支援を行うこと、展覧会や教育プログラムを通じて地域社会へ貢献すること」とある。研修終了時点において、常時業務を行うスタッフは 7 名。内訳はディレクターが 2 名、アートセールス担当が 1 名、スタジオ管理（版画制作設備やメディアラボ）に 2 名、レジデンス担当として 1 名、教育プログラムに 2 名いた（なお、このほか 1 名ほど欠員している状態であるようで、それぞれのスタッフが異なる業務も兼任していた）。この他に、展示のインストラクターや教育プログラムに関わる非常勤のアーティストらが複数名おり、子供向けのプログラムや大人向けのアートクラスの講師はプログラムごとに配置されている。学生を中心としたインターンも多く受け入れている。プログラムとしては、大小含めると年間 10 回ほどの展覧会、登録者は 24 時間利用できるスタジオの管理、週 3 日程度のティーン向けプログラム、下記に開催される 9 週間のサマーキャンプ、大人のアートクラス、アーティストインレジデンスプログラム、作品販売及びファンドレイジング、コミュニティープロジェクトなど、業務は驚くほど多岐に渡り、当初施

設規模からは妥当な人数にも思えたが、決して十分とは言えない職員で業務を行なっていると感じた。職員同士のコミュニケーションは風通しが良く、各プログラムの意思決定においても、各担当にそれぞれの裁量が与えられることで、効率的な業務が行えているように見受けられた。(新型コロナウイルスの影響以降であると思うが)在宅勤務を取り入れるなど、忙しいながらもバランスを取りながら仕事を行なっている様子が伺えた。多くの職員がアーティストでもあり、このことも施設運営において良い影響を与えているように感じた。また、初年度のプログラムとのことであったが、California Lawyers of Arts との共同で Designing Creative Future という元収監者を対象とした有給インターンプログラムも行われていた。社会へのエントリーポイントをアートの分野に置くというのは大変興味深く、先進的な取り組みであると感じた。

・Kala の事業目標

2023 年から 2025 年の 3 年にかけての目標設定を共有してもらったので簡単にまとめる。

「Kala Art Institute' s mission is to help artists sustain their creative work over time through its Artist-in-Residence and Fellowship Programs, and to engage the community through exhibitions, public programs, and education」とあるように、Kala のミッションの第一義は、アーティストの支援であり、コミュニティに関与することとある。具体的な目標設定のためのカテゴリーが以下のように分かれている。

1 Artist Engagement, Service and Support

2 Community Engagement

3 Organizational Resiliency

4 Equity, Diversity, and Inclusion

1 は、作家のサポートが重点に置かれている。持続的な活動のためのサポートとして、制作場所・技術のみならず、コミュニティと接点を持つことで、人脈作りなど機会を創出している。また今後は、(コロナの影響も大きい／人と会うことができなかった) より多くのコラボレーションの機会を作ることも挙げられている。

2 の Community Engagement については、地域住民に対し、アーティストの知名度を上げることも目標に挙げられている。Artist in school (AIS) 事業は 1991 年に開始され、近隣 2 市を含む 3 市 (Berkeley, Emeryville, Oakland) の小中高校で開催されている。また、今後 3 年間で、Kala での家族向けアート制作ワークショップ、オープンハウス、アーティストトーク、上映会、パフォーマンスなど、無料で参加

できる地域密着型のプログラムをさらに追加していく予定とのことである。

3の Organizational Resiliency については、組織のあり方について言及されている。プログラム内容だけではなく、組織内部についての言及があることが興味深い。財政状態は良好であるとのことである。

(これは、kala の培ってきた人的ネットワークによるものが大きいのかもしれない)歳入は、寄付金 50%、収入 50% (AIR, 教育プログラム、アートセールス) とある。今後に向けて、スタッフ・施設・インフラに投資する予定でもあるとのこと。Key Performance Indicators (KPI)/重要業績指標において、スタッフの増加や給与の向上、予算の増加などを挙げている。

4の Equity, Diversity, and Inclusion においては、施設や特定のプログラムに限らない全体の活動における指針として人種の平等や制度的不公平について目標が設定されている。異なる経験・人生経験を持つ人々とコミュニティーを作ることで、今一度コミュニティーについての想像や存在について考える。KPI において、スタッフ・ボードメンバー等の BIPOC 割合、BIPOC・LGBTQ +プログラム/参加者の増加も示されている。

これらの施設・運営目標について、定期的な見直しを行なっていることに関しても、施設とスタッフの意識の高さを垣間見ることができた。スタッフの入れ替わりや50周年という節目に向かってのこともあろうが、スタッフ間の風通しの良さもこれらの日常的な対話から生まれているようにも感じた。また、各打ち合わせも時間の区切りを設け、効率的に行われていた。



左から：Kala Studio 外観、ギャラリー側のスタジオでのパブリック向けWS、ギャラリー空間

【課題②】アーティスト・イン・レジデンスプログラム、プリントスタジオの運営、ギャラリーでの展覧会事業、教育プログラムなどの事業開始の経緯、運用における課題、成果、外部評価など達成できた

課題①の記載と同様に年間を通じて研修施設に通い、実際のプログラムに深く参加することで、各事業の関わりによる成果や課題を現場で体感することができた。研修員という性質上、施設の意思決定に参

加することはないため、客観的かつ至近距離で外部の視点からも課題等についても考えることができた
と考える。この経験は、今後自身が日本国内の文化施設等で芸術文化活動に従事することができた際
にも、総合的に施設や事業計画を考える上で重要な視点を与えてくれたと感じる。

・アーティスト・イン・レジデンスプログラム Kala におけるアーティスト・イン・レジデンスプロ
グラム（以下、AIR）は、通常の AIR と Fellowship プログラムの大きく 2 種類に分かれ、両プログラムを合計
すると年間 120 組以上のアーティストを迎えている。通常の AIR は年 3 回の募集を通じて、1-3 ヶ月の
期間、24 時間利用可能なスタジオで機材を使用し、制作をすることができる。基本的には、一定の金額
（2 週間で\$1,000 や、週 3 日/1~3 ヶ月で\$305 など）を支払い、施設を利用する形となる。また、希望
者には住居の提供もあるが、スタジオ利用と同様に有償（\$1,000）である。Fellowship プログラムにつ
いては、Kala Fellowship Program として年間約 6 名、Media Arts Residency Program として年間約 4
名、Parents Artist Residency Program として年間 3 名程度が招聘されている。上記の AIR とは異なり、
\$3,000 がグラントとして与えられ、それぞれ制作費や住居や Kala のプログラムの受講（版画技術を学べ
るなど）に充てることができる。

（そのほか退役軍人を対象とした Veterans Residency Program も年によって若干名ある）また各
Fellowship アーティストは、研修期間中に開催された「DIG & RISE」展のように年一回開催される
Fellowship の展示会に出品することができる。この Kala のレジデンスプログラムは、私が日本で見てき
たレジデンスプログラムの仕組みとはやや異なり、アーティストの制作環境支援に重点をおいたプロ
グラムとなっていると感じる。近年、日本国内で行われるレジデンスプログラムの多くは成果発表展の開
催が前提となり、主催者側の求める成果や地域への貢献が目立つように感じていた。それ自体悪いこと
だけではないと思うが、作品制作と発表のどちらかに重きが置かれるかは、アーティストにとっては集
中力をどこに割くかが変わってくるため、事業を行う施設や地域にとって短期的な効果か長期的な効果
か、目指すべき視点も異なると感じた。成果を求める上では可能な限り短期的に結果を求めがちではあ
るが、本研修では改めて時間のかかるコミュニティ形成の重要さなど、多くのことを学ぶことができた。

・プリントスタジオの運営



左から：フェローシップアーティストのオープンスタジオ、
フェローシップアーティストがプリントスタジオで制作した作品群（2023 年）、12 月拡張される空間の工事風景、
レジデンスアーティストがプリントスタジオで制作した作品の紹介

プリントスタジオは、創設者の2名が1970年代に出会ったパリの「Atelier 17」をモデルとして、個人では保有が難しい大型機材と技術共有の場となっている。スタジオには、版画のプレス機やレタープレス、シルクスクリーンの設備や写真現像の暗室など、多様な機材があり、AIR作家はスタジオスタッフのオリエンテーションを受け、使用できるようになっている。また、24時間アクセスできるため、夜でも誰かアーティストが制作をしていて、スタジオの明かりがついているのをたびたび見かけた。版画というメディアのみに限らず、1990年代初頭というかなり早い時期にマルチメディアセンターを開き、当時個人では手に入れにくかったコンピューターを導入するなど、版画以外の制作環境を提供したことは、当時のアーティストにとって非常に有益な場所であったと思われる。なお、AIRやFellowshipのアーティストは、滞在の終了時にKalaに作品を寄贈することとなっており、1970年代からのその蓄積は重要なコレクションとなっている。利益や合理性からはやや離れるのであろうが（実際に運営資金がかなり厳しい時期も長かったと聞いた）、単なる貸スペースではないコミュニティ形成意識が強く働いたことが、半世紀という継続をし続けることができた施設の中核の施設として重要な役割を担っていると感じた。

・ギャラリーでの展覧会事業

ギャラリーでの展覧会事業は、Kalaの展覧会が年間5回程度、そのほかに施設外の展示が年2回、教育プログラムと関連した展示などが開催されていた。外部企画や短期でギャラリースペース貸し出しによる展覧会などもあるが、基本的には指導者のHamanaka氏が担当して企画が行われていたため、研修期間中に開催された展示には全て関わることができた。過去の資料調査からは、kalaの設立当初より展覧会事業は開催され、当初よりアメリカ国外の作家を紹介する国際的な広がりを持った展開を行っていた。中でも具体美術協会の一員でもある松谷武判氏も最初期にkalaを訪れ、講演等を行なっている記録を発見することができた。創設者のNakano氏が日本出身であることもあり、日本との関わりが深いことも垣間見えた。研修期間中でも、下記に記載したように実に多様な展覧会事業が行われ、その事業の多様性のあり方を見ることは大きな学びとなったが、その中でもLGBTQや人種的公平性に関する意識を持った展覧会の作り方やテーマについては、日本国内ではいまだ強く感じえないものであり、今後重要な視点となると考えるため、これまで展覧会等の企画を行ってきた学芸員として、本研修での最も重要な経験となった。

研修期間となった一年で行われた展示が以下のものとなる。

- ・「[FOSSIL OF LANGUAGE, YUZO NAKANO](#)」 (January 28, 2023 – March 17, 2023、Kala創設者の1人の回顧展)
- ・「[ART KALA 2023](#)」 (March 30, 2023 – May 13, 2023、150名を超えるアーティストの参加した施設のオークション展)
- ・「[THE ARTS AND HUMANITIES ACADEMY SPRING EXHIBITION \(BERKELEY HS\)](#)」 (April 13, 2023 – April 28, 2023、地元高校のアートクラスによる展覧会)
- ・「[ARCHANA HORSTING, ON THE FRINGE OF THE FIELD, A SURVEY OF WORKS 1972-2022](#)」 (May 25, 2023 – July 7, 2023、

Kala 創設者の 1 人の回顧展)

- ・「[DIG AND RISE](#)」(July 20, 2023 – September 22, 2023、Fellowship アーティストによる成果展)
- ・「[The Embodied Press: queer abstraction and the artists' book](#)」(October 12, 2023 – February 9, 2024、外部キュレーターによる企画展)
- ・「[ANGELICA TRIMBLE-YANU: STRATA](#)」(May 1, 2023 – October 31, 2023) /Milvia/ Addison Windows
- ・「[EMMA SPERTUS AND CARLOTA RODRIGUEZ FROM NIAD](#)」(November 13, 2023 – May 15, 2024) / Milvia/ Addison Windows
(※本展は、報告者である五十嵐が企画を行った。)



左から : Nakano 氏の個展、ART KALA 2023、ART KALA プレビュー



左から : 地元高校生の作品展示、Archana 氏個展、DIG&RISE 展、DIG&RISE 出展作家のパフォーマンス



左から : The Embodies press 展、同展の出展作家によるパフォーマンス



左から : ANGELICA TRIMBLE、EMMA SPERTUS、CARLOTA RODRIGUEZ (Milvia での展示)

- ・教育プログラムなどの事業開始の経緯

プログラムの開始に関しては、正確な時期を調べることはできなかったが、創設者の 2 名に聞いた中で

は、早い段階から行われていたようであった。ギャラリーがある施設においては、特に子供向けのプログラムが行われている。[AFTER SCHOOL PROGRAM](#) (1ST-5TH) 、[TEEN STUDIO ART PROGRAM](#) (6-12TH)は、平日の夕方、ほぼ毎日のようにクラスが開催されている。Kala の職員が指導にあたるのではなく、プログラムごとに講師とアシスタントを雇用し、運営している。定期的な成果発表のイベントや、日々の運営の中ではスクールバスの停車場までの迎え、休憩時間の見守りなども含まれている。夏季には子供対象のサマーキャンプが長期間開催され、その他にも各種版画の技術を学ぶものから、デッサンや写真技術など大人向けのスクール、コミュニティー&家族向けのイベントなど多くのプログラムが実施されている。枠組みとしては、日本で言うところの絵画教室やカルチャースクールに近いものであろうが、子供向けのプログラムは学校やPTA など地域との連携をもち、運営されている。「Kala の教育プログラムは、私たちの活動の中心にあります。地域社会に根ざした組織として、Kala Art Institute は、地域のすべての子供たち、青少年、成人のための質の高い美術教育にしっかりと取り組んでいます」とHPにも説明があるように、「教育」に対する意識や責任を自覚的に持ち、地域の芸術文化教育に寄与していると要素が強いと感じた。



左から：WSで参加者が作った版画、スタジオ風景、ギャラリーでの子供を対象とした対話型鑑賞風景

・運用における課題、成果、外部評価

上記に記載した以外にも、作品販売、作品管理、コミュニティープロジェクトの実施など多岐に渡り、残念ながら1年間の研修では全てを把握しきれなかったのが現状である。全体的な運営方針は、月に一度のスタッフミーティング、2ヶ月に一度のARC(anti-racist committee group)ミーティング等で検討され、ボードメンバーでの会議にもかけられる。ボードメンバーは研修終了時点で18名であるとのことであった。ボードミーティングは毎月開催され、事業・予算の計画が共有される。事業評価についても、ボードでの意見は意識されているとのことであった。

ARCミーティングでは、隔月の会議を重ね、[Racial Equity Statement](#)を作成し、現在はHPにも掲載されている。

また、スタジオの利用アーティストらにも、同様の認識を持ってもらうように努めている。[Land Acknowledgement](#)においても、HPでの表記と各イベント(トークやパフォーマンスなど)にて必ずスタッフより来場者へ口頭で説明がされている。これらの差別解消や先住民や土地への敬意の念の表明は、多

種多様な人種が訪れ、関わる文化施設のあり方としても大きな学びとなった。またこれは、あくまで報告者個人の感想であるが、事業における人選においても BIPOC (Black, Indigenous, and people of color) に対する平等性を担保しようとする態度があるのではないかと感じた。これはアメリカの歴史的背景、中でも多様性への意識が高いとされる西海岸地域という土地柄も大きく影響しているのであろうが、研修施設以外の近隣文化施設、美術館等でも同様の人選／プログラム、対外的なメッセージにおいても感じることができた。寄付制度や文化の意識の強いアメリカならではのであろうが、成果や評価につながるものとして、寄付を得ることやそれにつながる社会的意義をもち運営を行い、それらを伝えることに対する強い意識を感じた。寄付等の獲得は運営に直結するため、必然的な努力ではあるが、支援者らの声からも Kala の行ってきた活動への信頼と期待を強く感じることができた。



イベント開催時に主催者より土地の歴史について説明される

【課題③】受け入れ施設における過去に行われた事業の調査、事業変遷経緯調査

達成できた

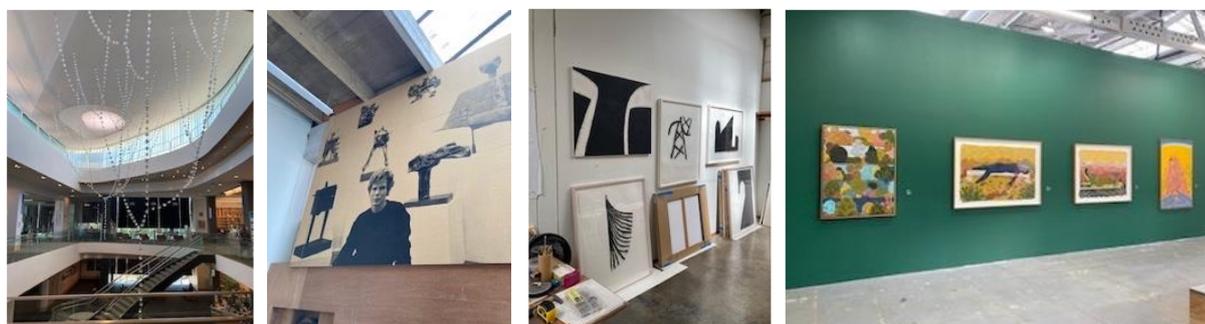
約 50 年と長い歴史のある施設であり、過去の事業全ての記録が残っているわけではないため、残念ながら十分に調査ができたとは言えないが、指導者を中心とした現スタッフや、創業者の 2 名 (Archana 氏、Nakano 氏) とともにヒアリングに協力いただくことができた。また、翌年の 50 周年に向けた準備の年であったため、過去の記録についてこれまでのスタッフも意識することの少なかった資料を見ることができ、調査することにも協力を得られた。直近数年のプログラムについては、ウェブサイトの記録をもとにしたヒアリングを行った。

【課題④】Parents Residency Program の調査

達成できた

アーティストへのヒアリング及び、Parents Residency Program への助成を行う団体 [Sustainable Arts Foundation](#) (SAF) の創設者 Caroline Grant と Tony Grant へのヒアリングを行い、同プログラムについての現状理解を深めることができた。SAF は、2010 年に財団を設立し、現在 273 の個人のアーティスト (ビジュアルアーティスト、文筆家)、60 を超える団体にレジデンスの支援を行っており、Kala は

2013年より継続して助成を取得している。Tony Grant 氏の父が著名なアーティストであったにも関わらず、Tony 氏の誕生後はアーティスト活動を控え、子育てを優先したという経験から、アーティストが子育てによってキャリアを中断しなくても良い状況作りの支援を行う、というところから活動を開始しているという。特筆すべきは、彼らは助成金の使徒を限定せず、制作・ハウジング・養育などどのようなものに当てても良いとし、また成果物の提出なども求めていない。事例は少ないが、海外からも応募することができた。両氏へのヒアリングの中から、アーティストに対する期待として、より良い社会・未来づくりのための芸術表現活動が重要であり、教育にとっても重要であるという点を強く受け取ることができた。なお、今後の活動の詳細は不明だが、カリフォルニア州の先住民のコミュニティに還元するプログラムに使用すると発表を行なっている。また、Kalaの過去のParents Residency Programの採択者としてEmma Spertus、またKalaのスタッフ、研修期間中に会うことのできた女性で子育て経験を経たアーティスト等にその都度、アーティストとしての活動と子育ての両立について話を伺った。多くのアーティストはパートナーの理解と協力があつたことや、日本の子育てを経験した女性アーティストたちと同様に、なんとか継続してきたというのが実際のところであるようだった。ただし、日本の事例と比べると（過去については公的な支援の無さという点では同様に感じるが）、女性アーティストの活躍という先行事例が多い点においては、社会の中での「女性アーティスト」という認知度と評価の違いは大きく、アーティストの活動継続を支えた力になっているように感じた。



左から：中学生の子供を育てながら作家活動を続ける Kana Tanaka 氏の図書館に設置されたパブリックアート、Archana 氏のスタジオ訪問(Archana 氏も育児をしながら作家活動及びKalaの運営を行なってきた 写真はArchana 氏の母の回顧展の際のパネル)、Archana 氏スタジオ、KalaのParents Residency Program採択者のRupy C. Tut 氏の個展

【課題⑤】過去のコミュニティープロジェクトの調査

あまり達成できなかった

課題③と同様に、私自身の調査にかける時間が不足していたこと（上記／下記に記載の他の調査や活動に重点を置いたこと）も大きな要因であるが、施設としても過去の事業については多く資料が残っているとは言えないこと、また存在しているとしてもその整理が追いついていないこと、そして現在進行形のプログラムが多く、施設としてのアーカイブまで手が回っていないことが一つの理由でもある。それらの状況からは、アーカイブの重要性を再考するきっかけとなった。Sue Mark 氏の [COMMONS ARCHIVE](#)

プロジェクトについては、同氏のアトリエを訪問して、ヒアリングをすることができたため、理解を深めることができた。事業ごとに様々な事業の立ち上がり方があると思うが、Planting Justice との事業においてもだが、アーティストの強い興味やこれまでの活動がベースとなり、文化施設 (Kala) の支援があることで、より意義あるプログラムとなる、という実感を得た。これは、施設や助成元が理想や期待を持って事業を開始・募集し、アーティストがそれに沿って提案・実施をするのとは異なる結果をもたらすものではないかと感じた。



Sue Mark 氏の〈COMMONS ARCHIVE〉プロジェクトが地域の公園で開催された際の風景

【課題⑥】現在行われているコミュニティープロジェクトの調査

達成できた

研修期間中に実際に行われていたプロジェクトは、すでに一部記載した元受刑者を雇用する農園である Planting Justice と 3 名のアーティストの共同プロジェクトのみであった。一般にオープンにしているプログラムではないため、通常は見学等ができないプログラムであるが、ワークショップや打ち合わせに実際に参加させていただくことができた。Kala としては 2023 年で終了となったが、助成金や Kala の支援の有無でプログラムを終了するのではなく、以後はアーティストが自発的に継続する予定であるとのことである。そのため、完全な終了とはいえず、まとまった成果物等があったものではないが、形式的な目標設定とそれに向かうプロセスというような進め方ではなく、参加者や協力者と対話を続けながら変更・更新をしていくプログラム設計については、大きな学びとなった。参加者の仕事の邪魔にならないよう施設側とも対話を重ね、参加者にとって当事者性と意味のあるプログラムを行なっているように見えた。何よりも、全ての参加者・アーティストが心より楽しんでいるようであった。もう一つのコミュニティープロジェクトである [Print Public](#) については、残念ながら研修中に具体的なアーティストの動きなどはなかったため、実見調査等はできなかったが、最終選考のインタビューに参加させていただき、最終候補のプレゼンテーションを見学することができた。ここでは、アーティスト自身がどのように社会との接点を意識し、活動することを考えているか、アーティストの態度や方法論を見ることができ、この経験も私自身にとっての大きな収穫となった。



Planting Justice での日光写真WS 風景

**【課題⑦】 受け入れ施設におけるエデュケーション・プログラム (Camp Kala/サマープログラム) 調査
あまり達成できなかった**

エデュケーション・プログラムに関しては、指導者とは異なるプログラムディレクターと専任スタッフがおり、また多くのアーティスト講師らが関わっていること、対象が年齢の低い児童らも多いことから、私自身からの関わり方が慎重になってしまった。開催中の全てのプログラムが見ることができたわけではないが、時折スタジオを訪れ、途中経過や成果物などを見ることができた。また、Camp を含めた年間を通して行われているエデュケーションプログラムの全体像はある程度理解ができたと考える。



Camp で写真のプログラムを受講した生徒たちの発表を保護者が見学

【課題⑧】 その他、展覧会企画等補助

大幅に達成できた

Kalaにおける展覧会業務が、指導者であった Hamanaka 氏の中心業務であり、私の美術館での勤務経験などを鑑み、実務や調査など多くの事業に関わらせていただくことができたため。課題②に記載をしたが、研修期間に開催した全ての展覧会に深く関わることとなり、それぞれの展示意図や展示にかかる調査ができた。来場者や関係者の反応を直接見ることができたことも、短期間の関わりでは得ることができない情報が得られたと考える。また、インストラクターや参加アーティストらから直接話を聞けることにもつながった。中心市街地にあるウィンドウギャラリーの企画を行わせていただくこととなり、Parents residency Program で過去招聘したアーティストの中から選ぶこととなり、研修課題の一つである

Parents residency Programの調査にも大きく影響した。研修期間終了後に開催となるが、2024年に開催されるkala 創立50周年企画展の調査を手伝わせていただくこととなり、過去のFellowshipアーティストを全て調査し、コレクション作品を実見し、50周年記念展の出品作品構成に関わらせていただいた。これは、研修課題の一つでもあるkalaの過去の事業調査や事業変遷調査にも繋がり、大変有意義な調査となった。



左から：Nakano 氏の個展のための作品移動、サンフランシスコで開催されたアートフェアに Kala が出展した際の展示作業、「DIG&RISE」展設営風景

【課題⑨】西海岸地域における SEA 事例の調査

達成できた

Socially Engaged Art の活動の性質上、現在進行形の場に参加することは、作家やコミュニティとの関係性構築が必要な点も多いため、実見調査ができたとは言えないが、下記に記載するいくつかの展覧会やパフォーマンス等を見ることができた。また研修地で見ることができた様々な展覧会や活動等を通して、西海岸地域になぜそのような活動が多いのかという点については理解が進んだ。

・Cara Levineによる《[This is not a gun](#)》は、いくつかのSEAの実例を紹介する書籍等にも掲載されている作品であり、研修期間中にThe Contemporary Jewish Museumにて見ることができた。アメリカにおける人種差別や警察の残虐行為等の社会的トラウマについての理解を深める目的の参加型アート作品とのことであったが、研修地における社会問題のリアリティに反応した作品を見ることができたことは重要な経験となった。

・Erika Chong Shuchによる《[The Welcoming](#)》は、残念ながら参加することができなかったが、地域の高齢者から話を聞き、参加者とディナーを取るという参加型パフォーマンスのようなものであり、高い注目と評価を集めていた。経済発展を続け、加速する人の出入りによるコミュニティの希薄化や、重要視されにくい地域史につながる個人史に目を向けるという点で、日本においても重要な課題であるものであると感じた。また同作家がサンフランシスコのChina Townで行ったパフォーマンスを見ることができたが、こちらも地域の中年～高齢女性と若者をつなぎ、自己&コミュニティ肯定につながるようなパフォーマンスであり、こちらも地域の課題に向き合う表現を見ることができた。

・その他にも、刑務所廃止運動をテーマとした [Maria Gaspar](#) による展覧会や活動家である [ANGELA DAVIS](#)

の展覧会など、展覧会における社会的背景との強い繋がりを現地にて見ることは非常に重要な経験となった。



左から：Erika Chong 氏のチャイナタウンでのパフォーマンス《For You》、Cara LevineによるTo Survive I need You To Survive展、Maria GasparによるCompositions展

【課題⑩】周辺芸術文化施設（レジデンス施設、アートセンター）のサーチ

達成できた

実際に現地を訪問し、活動を見学することや、レジデンス希望者の説明会に参加し、調査することができた。[Headland Center for the arts](#)は、周辺地域でも歴史が古く、地域内外の多くのアーティストが参加していた。ロケーション自体は決して便利とは言えない場所にあるが、年に2回ほど開催されるオープンスタジオを訪れた際には、多くの訪問者がおり、注目されていることが理解できた。また、滞在アーティストや過去の滞在作家などのイベントもオープンスタジオとは別で度々開催されており、上記に記載したErika Chong Shuchによるイベントなども同施設の協力のもと開催されるなど、他の施設との協力関係も強いことが見受けられた。また、40周年の節目の年であったため、過去の歴史をアーカイブした記録集が発行されるなど、良いタイミングで見学ができ、理解を深めることができた。ゴミ処理施設が運営する[Recology Art Center](#)においては、施設から出たゴミを利用して作品を制作するというユニークなレジデンスであるが、こちらのレジデンス希望者の説明会やオープンスタジオに参加した際にも多くの来場者やレジデンス希望者を見ることができた。環境保護運動とフェミニズム芸術運動の先駆者であった創設者のJo Hansonの街の清掃を作品化するというパブリックアートの実践と意義が現在も継続されているという点についても、施設のコンセプトとその意義をどのように継続させ、市民や周辺地域の意識に訴えていくかという芸術と社会の接点のあり方という点で重要な学びを得ることができた。また、Creative Growthと同様に、障害を持つアーティストの支援を行う[NIAD](#)とは、同施設で働いているアーティスト（EMMA SPERTUS）と協働して、施設の利用者であるアーティストの一名（CARLOTA RODRIGUEZ）と展覧会を開催することができたため、その途中で施設を訪問し、ヒアリングを行うことができた。両施設ともに、利用者とそこで勤務する職員がとても生き生きと、楽しそうに制作・活動（展示や販売）をしている様子は、「文化芸術／表現を楽しむ」という根本的な態度について再考させられるよう

な体験であった。



左から： Recology Art Center でのオープンスタジオ風景（2枚）、Headland Center for the arts 外観、Headland Center for the arts での Mark Thompson 氏の展覧会



Headland Center for the arts でのオープンスタジオ風景



左から：オークランドミュージアムで開催したNIADのアーティストが参加したInto The Brightness展（2枚）、NIAD ギャラリーの風景、NIAD 訪問後のNIADのインスタ投稿



左から：研修地の隣町にあるリッチモンドアートセンターでの展示、Thomas JacksonのCollaborative Nature、Andy GoldsworthyのWood Line

C) 研修成果の活用計画

実際に1年間という長期間の滞在を行うことで、当初想定をしていた研修内容以上にそれ以外の事柄

からの学びが大きかった。言い換えれば、研修中に得られた情報や経験から、興味や調査すべき内容の範囲が広がったとも言える。日本国内においては、現状感じえないと言っても過言ではない芸術文化事業に携わる人たちの多様性に対する態度や配慮について、日本国外、特に多様性の垣塙とも言えるアメリカ西海岸の研修地周辺に滞在することでその成り立ちや意義を感じることができ、重要な経験となった。芸術がいかにか社会と切り離せないものであるか、アーティスト・キュレーターや文化施設が芸術表現を他者に伝える際には、様々な問題を孕まざるを得ないものであるか、その難しさの一方で社会に対し、明確なインパクトと意義をもたらすことも含め、芸術の社会における役割の重さと価値を改めて強く意識するようになった。

Parents Residency Programの調査、そして自身の育児と芸術文化活動の両立の経験からも、育児を行うアーティストがどのような問題に向かい合い、支援や変化が必要かといった課題については引き続き国内でもヒアリングを続け、少しでも環境改善につながる活動をできればと考えている。また、今回得ることができた人的ネットワークを生かし、研修地域を拠点とする日本人・日系人アーティストを日本国内で紹介できるような活動も行なっていきたい。

直近の活動としては、大学付属の美術館の学芸員に着任することになったため、若い学生らと関わる機会も多いと思われるため、文化芸術の蓄積にかかる長期的眼差しや地域との関わり方、多様性に対する視点など、自身の経験を伝え、微力ながらも地域の芸術文化の保存発展に寄与していきたい。長期的には、アーティストのサステナブルな活動支援（特に子育てや介護などで制作活動継続に困難が生じる状況）について、また人種や性の問題など多様な価値観が生まれていく中で、誰しもが利用できる文化施設として多様性に対する配慮を行うことができるような取り組みに貢献できるよう、研究や調査、実践を行い、芸術による多文化共生と社会包摂の取り組みの活性化と発展に寄与していきたいと考えている。

D) 研修国の情報

当然ながら研修国全体について語ることはできず、研修地周辺の環境のみについて言えることだが、日本国内の美術館での勤務経験と比較すると、すでに記載したように開催されている展覧会や文化施設としての来場者への対応として、多様性への配慮が見ることができた。展覧会は女性や非白人アメリカ人男性の展示が多く、また施設のスタッフも同様に多様な人種が採用されているようであった。各芸術文化施設等の広報宣伝においては、チラシのような紙媒体は施設内における配布以外での他施設等での配布はほぼ見受けられず、SNSを中心としたウェブメディアでの広報となっていたが、一方で地域コミュニティ紙などでの情報発信は頻繁にあるようでもあった。

日本という点については、研修期間中の報告書にもあまり記載できなかったように、残念ながら注目がされているとは感じなかった。研修地域周辺にて、アフリカ系アメリカ人やヒスパニック、先住民のルーツのあるアーティストらへの注目と評価が進む中で、今後はアジア系にも目が向くことが予

想されるが、その中で中国や韓国、その他のアジア地域のアーティストらと同様に（特に現代アートの分野においては）日本人アーティストや注目が集まるかという点においては、その層が十分ではないのではないかと感じた。

最後に、3B-②にも記載したAIRプログラムに関してだが、研修を行った地域で調査したAIR以外にも複数のAIRが存在し、それぞれの事業目的が異なるが、多くはアーティストが安定した環境やサポートのもと作品制作に集中できる環境があった。長期間にわたりそれらのサポートを行うことで、地域の芸術文化振興やコミュニティ形成、地域における芸術の役割が強化され、豊かな文化を形成していると感じた。また、日本でアーティストインレジデンスをしてみたいという相談を複数受け、日本に対する文化的な魅力や可能性を感じているアーティストが多くいると感じた。

自身の経験からは、現在の日本国内におけるアーティストインレジデンス事業の多くは、地域振興や国際交流に重きが置かれ、作品発表をすることを念頭に置くAIRが多いため、アーティストにも実施団体にも短期間での成果を求められがちであると感じる。また文化庁の助成により、継続ができているものが多く、助成金が途絶えることで事業縮小やAIR事業自体を中止せざるを得ない団体もあるのではないかと感じた。AIRにはアーティストが自身の制作を行う他にも、実施団体やその地域にアーティストを通して形成される関係性や新たな視点が蓄積されていき、文化形成に大きな影響を与えるものであるため、一時的なものとして終わってしまうことで、すでに生まれた成果まで無くならないよう継続的な支援のあり方を検討いただきたい。



左から：オークランドミュージアムで開催したアンジェラ・デイビス展、アフリカンディアスポラミュージアムでの展示、サンノゼミュージアムでの展示



左から：村上隆氏のアジアアートミュージアムでの個展、SFMOMA での草間彌生展